

## —・フィツシャーの アシスタントに

Interview ⑯  
with

Šlekytė, Giedrė

取材・文=中東生  
Text-Shinobu Naka

# ギエドレ・シュレキー<sup>テ</sup> いま大注目の新星



まだ日本では無名に近いが、これからどんどん名前が出てくるに違いない © 中東生

かつたことを掘り出します。譜面のほかには、もっと小さな動きでも同じような表現ができるようになりたいのですが、音楽があまりにも大きいと、自分のジェスチャーもどんどん大きくなってしまうのです。学生のころは、振りかたもいちいち段取りを考え勉強していましたが、いまは譜読みの際にはまったく動きません。音楽だけをひたすら読み深めて、オーケストラの前で、初めて振ります」

—曲を練り上げるときはどのような手段を使っていますか。

「譜面を読み込み、作曲家が表現した

—貴女の指揮姿は、最初はオーバージエスチャーに見えたのですが、じつは曲想とピッタリ合っていて、表現の一部として邪魔にならず、目が離せなくなりました。

「それはうれしいです。無駄な動きはしら質問攻めにしてみた。

—貴女の指揮姿は、最初はオーバージエスチャーに見えたのですが、じつは曲想とピッタリ合っていて、表現の一部として邪魔にならず、目が離せなくなりました。

—舞台上演ではとてもシャイには見えず、そのポジティヴ・オーラに圧倒されますぐくつて、そのうち、「アシスタントをやつてみたい?」と声をかけてくれて、ベルリンについて行きました。彼は多くの若い指揮者をサポートしてくれています」

意識を変えたコロナ禍

—舞台上では別ですし、指揮台で音楽を創つていると、自分のシャイな部分を意識する暇もありません。初共演となるオーケストラとの初稽古前日などは緊張しますが、練習が始まれば、そんな暇もないので大丈夫です。本番では

も好きでした」

—見学したいと申し出ると、先輩指揮者たちの反応はどうですか。

「大体好意的です。でも、自分で指揮者にかけあう勇気はなかったので、たいへんはエージェントやドイツの指揮者フオーラムなどを通して許可を得てもらいました。たとえばイヴァン・フィツシャーさんなど、ベルリンやブダペストで何度も練習に通っているうちに顔見知りになつていて、ある日、シャイな殻を破り、話しかけてみました。すると、ずっと前から『だれだろう』って思つていらしたらしくて、そのうち、「アシスタントをやつてみたい?」と声をかけてくれて、ベルリンについて行きました。彼は多くの若い指揮者をサポートしてくれています」

意識を変えたコロナ禍

—舞台上では別ですし、指揮台で音楽を創つていると、自分のシャイな部分を意識する暇もありません。初共演となるオーケストラとの初稽古前日などは緊張しますが、練習が始まれば、そんな暇もないので大丈夫です。本番では

音楽にすべてを委ねます。自分のは、ボジティヴだけど奇抜なことはしない、おつとりタイプだと思います。感情は激しいと思いますが、悪い状況でもその解決策を探すのが得意です。どんな物事も、別の観点から見ると『抜け道』があるのです。これは私のモットーです。たとえばコロナ禍で、コペンハーゲンやベルリン、シュトゥットガルト、チューリヒなど何年も前から準備していた仕事がなくなりました。でも、それが私の意識を変えたのです。私はまだ自分自身を見ている段階で、振りたいレパートリーはたくさんあります。今までブルックナーやワーグナー、R・シュトラウス、マーラーなどの大作を振っていました。でも、パンデミックで家にいると、「将来のことはだれにもわからぬのだから、なぜ待つ必要があるだろう」という気持ちになり、ブルックナー『交響曲第3番』の仕事を受ける決意につながったのです！ 基本的に笑うことは好きで、生まれたときから笑っていたそうです。赤ちゃんのころ、笑い声を録音して父に送ろうとしたのに、録音中だけ声を出さずに笑うので、諭めて録音をやめるとまた声を出して笑つた母が思い出話をします。じつは、私が生まれたとき、数学者の父は日本へリサ一人に行っていたのです。当時のリトアニアはソ連の一部で、独立に向けて不穏な情勢だったので、もし戦争でも起こったら、父は家族を日本に呼び寄せるつもり

なっています。もしそうなっていたら、私は日本人になっていたのに！ だから、日本に行くのは夢です

### 指揮者への経緯

——日本人になっていたら、指揮者にはなっていなかつたかもしれませんよ。どんな経緯で指揮者を目指したのですか。

「祖母はピアニストになりたかったのに、反対され法律家になりましたが、隠れてピアノを習つたそうです。彼女のピアノを私が使つていて、祖母の夢を叶えたようになります。母は歯科医で、音楽は『習つたことがある』程度です。リトアニアでは教育のために、音楽やス

ポーツ、ダンスをさせることが多いので、私も5歳のころ児童合唱団に入りました。先生に声と耳を認められて、チューリヒに交換留学もしました。その後クラーゲンフルト市立劇場の第1カベルマイスターから積み上げましたが、音



もしかしたら日本人になっていたかも、と話すシュレキーテ © Giedrė Šilekutė



© Sergio Veranes Studio

**ギエドレ・シュレキーテ**  
1989年生まれ、リトアニア、ヴィリニュス出身。同国芸術系エリートたちを育てる国立チュルリョーニス芸術ギムナジウムで学び、グラーツ芸術大学、ライプツィヒ音楽演劇大学へ留学。2016年にクラーゲンフルト市立劇場の第一カベルマイスターに就任し2018年まで務めた。マルコ国際指揮者コンクール最高位、ザルツブルク音楽祭ヤング・コンダクター賞受賞。2018年国際オペラ・アワードのニューカマー賞にノミネートされた。

樂に関する夢は描かないようにしています。目標を定めてしまふと、叶わなければ落胆するし、叶つたあとに実力が落ちた同僚をたくさん見て、『途

こそ目的地なり（孔子）』です」